

名古屋市立大学理事長 郡 健二郎氏に聞く



全国屈指の6病院を医学部付属として躍進する名古屋市立大学（本部・名古屋市瑞穂区）が2つのキャンパスで、教育・研究拠点となる新棟建設に着手、相次いで起工式を行った。市立大学病院北側には、日本最大級の救急災害医療センターを建設中で、来年6月にオープン予定。南海トラフ巨大地震への懸念も高まる中、災害対応での地域貢献にも万全を期す。開学75周年を迎えた同大の郡健二郎理事長に展望などを聞いた。

郡 健二郎（こおり・けんじろう）1949年1月生まれ。73年大阪大学医学部卒業、77年近畿大学医学部泌尿器科助手、85年英国南マンチェスター大学留学、93年名古屋市立大学医学部泌尿器科教授、2001年同大医学部付属病院長、05年同大医学研究科長・医学部長、14年同大理事長・学長、22年から理事長。医学博士（大阪大学）。日本泌尿器科学会坂口賞、中日新聞社中日文化賞、日本医師会医学賞、杉田玄白賞、紫綬褒章を受賞。

全国屈指の病院群、災害救急医療拠点に教育研究棟2棟も建設 開学75周年、その先へ。トップの大学を目指して人材育成

—これまでに整備された医学部付属6病院群、計2,223床の意義、効果を改めてお聞かせください。

郡健二郎理事長 病床数や重症度などによって変動はしますが、例えば急性期の看護師数は患者7人に対して1人などと配置基準があります。医師の数は決まっていますが、医療には専門性が求められ、ある程度の医師がいないと、良い医療はできません。6病院を医学部付属として、医師数が増え、専門性を特化した病院が生き残ると考えたのです。東部、西部医療センターではそれぞれ約100人の医師を180人ほどに増やし、体制を整えました。スケールメリットに加えて、大学病院ということで、若い研修医を含めて全国から優秀な教授クラスの医師が集まりました。患者さんに提供する医療は質量ともに充実することができたと思っています。

—良い医療の提供で、患者も増え、経営も向上くという好循環が期待できるというわけですか。

郡理事長 そうなるといいのですが、昨年度は厳しかったです。医師などの報酬は、国公立は人事院勧告に従う必要がある一方、診療報酬は増えていません。令和6（2024）年度は患者さんは増加しましたが、医師の働き方改革もあり、人件費増などで多くの国公立病院同様、2つの病院を除

き赤字でした。来年4月の診療報酬改定を期待しています。

—大学のステータスも全国的に上がってきているのでは。

郡理事長 いやあ、まだまだですね。先日、横浜市の医療系財団の幹部が来られて講演会の講師を頼まれましたが、話の中で、本学は関東ではほとんど知られていない、と言われてしまいました。

—今年が開学75周年。歴史と伝統は地域に根付いています。

郡理事長 10月28日に75周年を迎えます。委員会企画をしていますが、名市大の名の下に皆が集まり、大学への愛をもって100周年を目指すことをキャッチフレーズにしています。地域貢献度は2回連続で全国1位の過大な評価を得て、市民に教育・研究の成果を還元すべく努力しています。

—大学の滝子キャンパス（瑞穂区瑞穂町）と田辺通キャンパス（同区田辺通）でこの夏、相次いで新棟建設の起工式を行いました。概要を教えてください。

郡理事長 滝子には教育・研究拠点として研究施設、教室、図書館、食堂など備えた新棟を整備します。地上5階建て、延べ床面積約23,000㎡で、2027年9月供用開始予定です。全学部の新入生